

大阪府福祉基金地域福祉振興助成金
(地域福祉推進助成・施策推進公募型事業)

**「地域におけるヤングケアラー支援の
モデル事業」**

令和5年度 事例集

令和5年度大阪府福祉基金地域福祉振興助成金地域福祉推進助成
 (地域におけるヤングケアラー支援のモデル事業) 総合評価

団体名	事業評価	事業名
社会福祉法人 大念仏寺社会事業団	S	ウィズ学習会 ウィズJr.学習会
特定非営利活動法人 あそーと	S	高校内でのサードプレイスの設置によるヤングケアラーへの支援
NPO法人 FAIR ROAD	S	「日常に寄り添い会話から始まる支援」ヤングケアラー 孤立予防支援事業
社会福祉法人 八尾隣保館	S	学習支援びはーと
特定非営利活動法人 kunこころの宮	A	ヤングケアラーの常設の居場所運営とヤングケアラーサポーターの育成事業
一般社団法人 こもれび	S	『夢をあきらめない!』～ヤングケアラーと地域社会をつなぐ架け橋事業～
NPO法人 やんちゃまファミリーwith	S	「ほっといたらアカン!子どもが子どもらしく生きる」を支える
特定非営利活動法人 み・らいず2	S	ヤングケアラーの子どもたちが「自分」を優先し社会参加できるプロジェクト
特定非営利活動法人 ふうせんの会	S	ピアサポートの力を活かしたヤングケアラー支援モデル事業
特定非営利活動法人 子ども・若もの支援ネットワークおおさか	S	ひとりじゃない!ヤングケアラーの居場所と相談をもっと身近に～高等学校内に居場所と相談ブースを開設～
社会福祉法人 大阪福祉会	S	ヤングケアラーの権利のための無料相談

地域におけるヤングケアラー支援のモデル事業

(1) 事業実施期間：令和5年4月1日～令和6年3月31日

(2) 各団体の申請事業の概要

➤これまでの活動を活かし・発展させた事業

- これまでヤングケアラーと思われる子どもたちも含めた食事や学習支援、学校内居場所事業等を実施する民間支援団体が、今回の助成事業を機に、ヤングケアラーへの継続した支援を行うため、その支援スキルを活用し、ヤングケアラーにかかる相談、体験活動、居場所づくり等を行うとともに、行政等との連携会議や地域住民への啓発セミナー等を実施。

➤当事者（現・元ヤングケアラー）によるピアサポート事業

- 当事者同士が安心して経験を語り合う「つどいの場」等の開催に加え、ピアサポートの充実や当事者支援で培ったスキルの周知等を実施。

<p>社会福祉法人 大念仏寺社会事業団</p>	<p>P1</p>
<p>●事業計画</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ボ・ドーム大念仏」を退所した児童や、地域のひとり親家庭の児童、不登校児・引きこもり等のヤングケアラー又はその可能性のある子どもを対象とした、学習支援や居場所の提供（週5日） 見守りや相談支援等の専門的な支援の提供 ・当法人が実施している学童保育や地域こども食堂等と連携し、取組みの周知を図り、要支援児童を把握する <p><団体のこれまでの取組等></p> <p>母子生活支援施設「ボ・ドーム大念仏」等を運営。退所した児童に対するアフターケアとして学習支援活動を行い、退所世帯の状況把握・相談支援を行っている。 http://www.dsw.or.jp/</p>	
<p>特定非営利活動法人 あそーと</p>	<p>P2</p>
<p>●事業計画</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校内に全生徒が利用可能なサードプレイスを設置する、高校内居場所カフェの実施（年30回） 生徒に関する情報共有や運営に関する質の向上を目的とした学校との連携会議の実施（年6回） ボランティア参加を促すことで府民のヤングケアラーへの理解を深めることを目的としたボランティア講座の実施（年2回） <p><団体のこれまでの取組等></p> <p>大阪府教育庁課題を抱える生徒フォローアップ事業を受託し府立高校2校で高校内居場所カフェを実施。その他、居宅介護事業、就労支援B型事業等を実施。 https://npo-assort.com/</p>	
<p>NPO法人 FAIR ROAD</p>	<p>P3</p>
<p>●事業計画</p> <ul style="list-style-type: none"> 通信制高校に介護や家事から解放された自分の時間を過ごせる場所を作り、学習支援や相談支援を行う高校内居場所（週1～2回） 中学生以上のヤングケアラーを対象にした相談窓口を設置し、中退や卒業後も相談ができる出張居場所カフェ（西成区、港区、生野区）（各区月1回） 区民や支援者へのヤングケアラーの啓発を目的に、ヤングケアラー支援に関する実践報告をするシンポジウム（西成区、港区、生野区）（各区年1回） <p><団体のこれまでの取組等></p> <p>大阪府教育庁課題を抱える生徒フォローアップ事業を受託し府立高校3校で高校内居場所カフェを実施。中学校内居場所事業や地域の居場所事業等も実施。 https://fairroad.org/</p>	
<p>社会福祉法人 八尾隣保館</p>	<p>P4</p>
<p>●事業計画</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習支援を通じた居場所の提供と相談の場（週2回） ※受け入れ対象を中学生から高校生へと拡充 タブレットを活用した繋がり確保と居心地の良い環境構築 <p><団体のこれまでの取組等></p> <p>母子生活支援施設等を運営。退所者へのフォローアップ、又は、行政や地域の小中学校等との連携体制の中で、支援の必要な子どもの発見や発見後の連携を推進。 https://yaorinpokan.or.jp/</p>	
<p>特定非営利活動法人 kunこころの宮</p>	<p>P5</p>
<p>●事業計画</p> <ul style="list-style-type: none"> おやつと食事（調理を含む）、雑談と休憩の時間を共に過ごすことで信頼関係を築いた上で相談対応等を行う居場所（食事・学習支援）（週3～4回） SNS（みまもりあいアプリ）を活用した周知 ・ヤングケアラーの卒業者、支援者らに経験談をスピーチしていただくシンポジウムの開催（年1回） <p><団体のこれまでの取組等></p> <p>カウンセリング講座や傾聴講座等を実施。子育て支援活動「hug」では、高齢者施設利用者と幼稚園児、保育園児との世代間交流活動に取り組む。 http://kun-kokoronomiya.org/</p>	

<p>一般社団法人 こもれび</p>	<p>P6</p>
<p>●事業計画 ・シンポジウムの開催(年1回) ・専門職研修(月1回) ・相談窓口(月4回) ・放課後の居場所(月6回) ・音楽教室(月1回) ・音楽祭(年1回) <団体のこれまでの取組等> 大阪市子ども自立アシスト事業の受託。居宅介護支援、児童発達支援、放課後等デイサービス等の運営。自主事業で、子ども食堂や不登校の子どもの支援などに取り組む。 https://www.kmr.jp/</p>	
<p>NPO法人 やんちゃまファミリーwith</p>	<p>P7</p>
<p>●事業計画 ・地域住民への啓発フォーラムの開催(年1回) ・元ヤングケアラー等を講師に招いた講習会・勉強会(年12回) ・相談窓口の設置(月4回)、個別相談(月7回程度)、支援員コーディネーターや支援員による個別支援(随時) ・啓発フォーラム開催及びヤングケアラー支援のためのサービス開発ができるよう、関係者による会議を定期開催し、講習会や支援策の検討を実施(月1回) <団体のこれまでの取組等> 松原市地域子育て支援事業の受託、子ども食堂、おやこ食堂など子どもの居場所に関する事業や子育て・教育に関する相談事業等を実施。行政や市社協等と連携。 https://yanchama.net/</p>	
<p>特定非営利活動法人 み・らいず2</p>	<p>P8</p>
<p>●事業計画 ・啓発セミナーの開催(年1回) ・調理や食事を通じた体験学習、相談の機会の提供(自分時間プロジェクト 週1回程度) ・仲間たちと協力し、やってみたいことを企画、実践し、自信を回復する機会の提供(チャレンジプロジェクト 月3回程度) ・多様な職種の話聞き、将来を考える機会の提供(あきらめずにチャレンジしていよプロジェクト 月1回程度) ・地域連携担当の配置(週1回) <団体のこれまでの取組等> 堺市ユースサポートセンターの受託。計画相談支援、居宅介護、放課後等デイサービス、就労移行支援等の運営。日本財団の助成により子ども第三の居場所等を運営。 https://me-rise.com/</p>	
<p>特定非営利活動法人 ふうせんの会</p>	<p>P9</p>
<p>●事業計画 ・つどい(ハイブリット)(年6回) ・オンラインサロン(ふうせんカフェ)(年6回) ・ピアサポーター研修の実施(年2回) ・社協フェスタへの参加(年1回) ・正確なヤングケアラー理解並びに啓発先とのネットワーク構築を目的とした、啓発パンフレットの作成 ・外国にルーツをもつ現・元ヤングケアラーやその家族などを対象とした多言語(英語、中国語、韓国語、タガログ語、ポルトガル語、ベトナム語)動画の作成 <団体のこれまでの取組等> ヤングケアラーの当事者の会として、ヤングケアラーのピアサポートや啓発活動、関係団体との交流・連携などを実施。 https://peraichi.com/landing_pages/view/balloonyc/</p>	
<p>特定非営利活動法人 子ども・若もの支援ネットワークおおさか</p>	<p>P10</p>
<p>●事業計画 ・ヤングケアラー及び元ヤングケアラーの声を届け、ヤングケアラー認知度向上に繋がるフォーラムの開催(年1回) ・ヤングケアラー当事者及び関係者に対する相談支援活動として、相談窓口の設置(週1回程度) 家庭訪問、面談、SNS相談等(週3~4日程度) ・高校内居場所&個別相談(週1回程度) ・関係者(教職員、SSW、SC)等と情報交換やケース会議を定期的に実施(年4回) <団体のこれまでの取組等> 大阪府教育庁課題を抱える生徒フォローアップ事業、河内長野市生活困窮者世帯等の子どもの学習・生活支援事業、富田林市ひきこもり相談窓口等の受託。 https://nw-osaka.com/</p>	
<p>社会福祉法人 大阪福祉会</p>	<p>P11</p>
<p>●事業計画 ・社会福祉士や心理士等の有資格者が対応にあたりヤングケアラー当事者や世帯が気軽に相談できる来所面談、電話、オンラインの相談窓口の設置(月14日) ・学習支援をしたり、食事を一緒に調理・喫食する集いの場を設け、世帯支援へつなげる(月4回程度) ・世帯に対する家事支援(月4回程度) ・元ヤングケアラーを招いたセミナーの開催(年2回) <団体のこれまでの取組等> 母子生活支援施設「ハピネス・ハーク」等を運営。DV被害者等援護事業、緊急一時保護事業、夜間・休日DV電話相談事業、地域子育て支援拠点事業等に取り組む。 http://osakafukushikai.or.jp/</p>	

ウィズ学習会 ウィズ Jr.学習会

団体名 社会福祉法人 大念仏寺社会事業団

●事業実績（令和5年度）

対象者：入所児童・地域の児童(退所児童を含む)とその保護者等

参加（延べ）人数：3,323名

実施回数：204回

<内容> ウィズ学習会 平日毎日開催 14時～18時ごろ

ウィズキッチン 週1日開催 17時～19時

ひらのこどもみんな食堂 食材センター

平野区、近隣こども食堂への寄贈等の食材提供

役所、学校等との連絡会 毎年1回

<効果>

- ・学生ボランティアや企業ボランティアが活動に参加するようになった。
 - ・ウィズキッチンでは、一度参加した子どもが友だちや知り合いを呼んで、参加メンバーが増えた。
 - ・平野区、近隣のこども食堂とのつながりができ、情報交換ができています。
- YC 支援事業の話や日常的なやりとりをするうちに、個別支援の助言を求められることもある。
- ・役所や学校に事業のPRをした。役所からは要支援世帯とつながるきっかけとして食材センターの食材を依頼されることがあった。

●工夫したこと・カを入れたこと

- ・学習会ではできるだけ自分で考えてもらい、分からない時は一緒に考えて、自分で答えを出せるようになった。
- ・ウィズキッチンでは彩りやうす味にすること。苦手な食材がある子には、無理はせず、その子どもに合った分量を確認しながら食べてもらい、最後まで楽しく食べることができるようになった。
- ・YC 支援事業を社会福祉協議会、地域こども食堂、地域の福祉施設、地域企業へPRを行った。地域のこどもたちを地域で見守ることをPRしながら担い手を増やせるようにした。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

- ・落ち着いた環境で個々のペースで勉強に取り組んでいる。
- ・ウィズキッチンでは、こどももお腹いっぱい食事をとることができ、職員や参加者と楽しく会話している。
- ・初めて参加した保護者も何度か参加してもらおううちに自分の身の回りのこと、子どものことを話してくれるようになった。次回が楽しみだと言ってもらえるようになった。
- ・事業をしていくうちに多くの支援者から寄附等の申し出があったり、事業を見学したいとの依頼があったりして驚いた。



高校内でのサードプレイスの設置によるヤングケアラーへの支援

団体名 特定非営利活動法人あそーと

●事業実績（令和5年度）

対象者： 全日制高校に通うヤングケアラー状態にある高校生

参加（延べ）人数：631名

実施回数：26回

内容：府立高校内にカフェのような空間のサードプレイスを設置し①ヤングケアラー自身へのケアの提供②困難さの発見③卒業後の潜在化予防、を行う。サードプレイスでは無料のドリンクやおやつを片手に友人と一緒に過ごしたり、大人(ボランティアやソーシャルワークの専門家)とリラックスしながらお喋りを楽しむことができる。ヤングケアラーの如何に関わらず利用できるカフェのような場所とすることで参加の敷居を下げ対象者と支援者が出会える機会を作りやすくなる。またリラックスした時間は①ヤングケアラー自身のケアに繋がる。リラックスした関係性は時折ポロっと愚痴をこぼさせ②困難さの発見に繋がっていく。関わりの中で支援者が困難さを発見することもある。そして在学中に培われた関係性は卒業後の当法人とのつながりとなっていく③潜在化予防にもつながっていく。

効果：

- ①リラックスした時間の中でヤングケアラー自身へのケアを提供した。
- ②カフェ利用生徒とのコミュニケーションによりヤングケアラーの生徒が発見された。
- ③卒業時に当法人の相談窓口を伝えることができた。

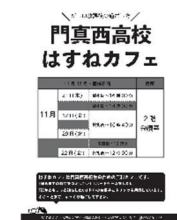


●工夫したこと・カを入れたこと

- ・校内での多数のチラシ掲載や看板を利用し、より多くの生徒に知ってもらえるよう取り組み、校内での定着を進めた。
- ・初回利用につなげるために、ドアは常に開放しておき外からでも様子を伺うことができるようにした。また、教員にカフェの目的を共有し、教員から生徒への直接の利用促しを行って頂いた。
- ・高校内でのサードプレイスとして機能させるために、コーヒーの香りやリラックスした音楽などを活用し、学校空間のイメージからは少し離れた空間となるよう工夫をした。
- ・学校側との連携会議を実施し、生徒の状況についての共有をすすめ適切なコミュニケーションを行えるようにした。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

- ・ヤングケアラーとして把握されている生徒がサードプレイスに定着し延べ30回(実人数4名)の利用となった。
- ・サードプレイスでの会話により発見されたヤングケアラー生徒について学校側と情報共有を行うことで校内での支援につながった。
- ・たくさんの友人と盛り上がる生徒、1人でゆっくり過ごす生徒など、それぞれのリラックスした時間を過ごす姿が見られた。



「日常に寄り添い会話から始まる支援」ヤングケアラー孤立予防支援事業

団体名：NPO 法人 FAIR ROAD

● 事業実績（令和5年度）

対象者：

- ① 桃谷高校通信課程在籍生徒
- ② 法人が運営している校内居場所で出会った中学生年齢以上のヤングケアラーの可能性がわる若者（卒業+中退生を含む）

参加（延べ）人数：

- ① 1247名+②（出張101名+訪問/同行60名）

実施回数：

- ① 高校41回+②（出張33回+訪問/同行60回）

内容：

- ・理由なく誰でも利用できる「カフェ」空間。
- ・法人スタッフの他、民生委員や児童主任委員などの地域関係者、大学生、卒業生がスタッフとして関わる。
- ・通信制の生徒と出会う学校内居場所の開設により、ヤングケアラー等課題を抱える子どもたちのセーフティーネットを強化する。
- ・活動拠点となる3つの地域で「出張居場所カフェ」を開き、中退や卒業後も相談ができる見守りのある場所を作る。
- ・相談窓口を設置し、必要に応じて訪問や同行支援も行う

効果：

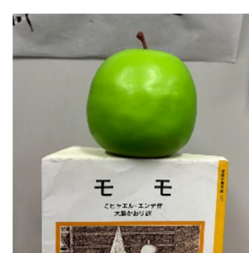
- ・桃谷高校の生徒に地域/学校/行政など多様な大人が関わるようになる。
- ・学校関係者がヤングケアラーの状況と支援ニーズを把握できた
- ・校内外の居場所活動とシンポジウムに地域の多セクターが関わり、各地域の子どもを取り巻く関係機関が、相互の役割を理解し、気軽に相談し合える関係性が構築された。

● 工夫したこと・力を入れたこと

- ・社協との連携＝福祉サービスや家庭の見守りへのスムーズな接続
- ・「ケア(ケアラー)」についての思考を深める＝シンポジウム
- ・既存の地域資源を活かした居場所づくり＝地域の会館や隣保館を活用
- ・スティグマへの配慮＝誰でも参加できるカフェスタイル
- ・集団から個別対応へ＝SC・SSWとも連携した運営

● 子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

- ・モモカフェのおかげで人と話すことが楽しくなりました。居てとても居心地がいいし、授業の合間の暇な時間でも学校にいる楽しみが増えました。これからも、できたらずっとモモカフェは続けて欲しいです(生徒)
- ・いろんな人とつながれて楽しい空間でした(生徒)
- ・みんなといっぱい話せて楽しかった(生徒)
- ・お金なくて飲み物とかを買えないときには、モモカフェに行って飲み物とかを頼みます。モモカフェがあってよかったです。(生徒)
- ・相談窓口には行けないし、忙しいのに連絡するのも申し訳ないけど、こうして会える場所を作ってくれたら生きやすい(出張/卒業生)
- ・高校では家のことを話にくいねん、だからやっぱり前から知ってる人とこうやって会えると嬉しい(出張/卒業生)
- ・家の片付けしに来られるんははじめはいややったけど、やっぱり一人ではできひんかったからめっちゃたすかった。(出張/卒業生)
- ・やっぱりお金がしんどい。(出張/卒業生)



学習支援びはーと

団体名：社会福祉法人八尾隣保館

●事業実績（令和5年度）

対象者：中学生・高校生以上

参加（延べ）人数：507名

実施回数：85回

内容：

母子生活支援施設職員だけではなく、学生スタッフ、心理の資格を持つスタッフなどと情報共有を行いながら協働して子どもたちと関わることで子どもに対し様々な視点を持ちながら支援を行うことができた。

施設のノウハウを活用することにより、子ども達と一緒に楽しく様々な行事を行うことができた。また、食事をするだけではなく、子ども自らが調理を行い、楽しみながら時間を過ごすことが出来た。子どもの意見を聞き取り、取り組みの中に反映させることで、子どもの自己肯定感の回復および子どもが主体である環境を構築できた

効果：

様々な課題を抱える子どもや、校区外の子どもも増えてきている中で、皆が主体となり楽しく過ごしている姿が良く見られる。休みがちな子どもも、レクの時間になると顔を出してくれたり、メイン行事を行うときは参加をしてくれたりなど、確実に子ども達の居場所になってきているように感じる。また、親との関わりも意図的に行うことで、親子関係にも良い影響が及んでいると思う。

●工夫したこと・力を入れたこと

様々な背景を抱える子どもたちと関わることで、地域ニーズや子どものニーズ、さらには親子でのニーズも見えてきたように思う。実際に子どもへの居場所だけでは大きな解決にはならない。子どもや親、それを取り巻く大人がみんなで悩み、同じ方向を向くことが出来る関係性の構築が居場所を作ることにより実現できるのだと改めて感じた。子どもの状況をより共有できるよう、共有ファイルを作成し、全員で同じ視点を持ちながら関わりができるように努めた。また、今後の事業の方針を、施設職員だけで話し合うのではなく、スタッフも交えながら話し合いを行うことで、きめ細やかなアプローチができたと思う。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

「次は何作るん?」「ここに来るの楽しみやねん」など、子どもからの声を聞くことが出来ている。実際に日を重ねるごとに子どもたちの笑顔は確実に増えていると実感している。保護者にもアプローチすることで、子育ての悩みや困りごとを話してくれることもあり、親子関係(再)構築支援を行うこともできていると感じる。実際に保護者からは「子どもと話す時間が増えました」などの声もあり、子どもだけではなく、居場所があるからこそその親子支援ができていると思う。



ヤングケアラーの常設の居場所運営とヤングケアラーサポーターの育成事業

団体名 特定非営利活動法人 kun こころの宮

●事業実績（令和5年度）

対象者：

参加（延べ）人数：1019名

開所日数：132日

内容：

5/20 開所説明会：37名

7/30 夏祭り 参加者54名

3/2 ヤングケアラー支援を考えるシンポジウム：37名

・来所した子供：延152名、うちヤングケアラー予備軍（SSW認定）：延12名

・無料塾：36回開催、参加生徒数延95名、ボランティア講師数延85名

*無料塾がきっかけで来所したヤングケアラー未達の児童数延12名、同行・相談をおこなった学校行政関係者延17名

・自習室：44日開室、参加人数延15名、みまもりボランティア延12名、

・ヨガ：10回開催、参加者数延35名

・ピアメデイエーション：11回開催、参加者数延25名

・シュタイナー：11回開催、参加者数延32名

・進路相談：7回開催、相談者数延6名

・来所した外部ボランティア：延131名

・他の支援団体の勉強会、専門職との会議などの折衝：延300名

・元ヤングケアラー直接インタビュー：2名

・みまもりあいアプリ登録者数：290名

・自主事業のサポーター養成講座：20名

効果：居場所の認知度が高まり地域の学校との連携ができた。

●工夫したこと・力を入れたこと

- ・無料塾の実施、自習室の解放など小中高校生向けの学習支援
- ・みまもりあいアプリを利用した元ヤングケアラーのインタビュー音声番組
- ・天王寺区こどもサポート推進員、SSWとの連携で小中学校との接続

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

・無料塾の実施により、SSWが積極的に小中学校との接続を進めてくれている。課題を持つ家庭が見えることで、親の支援と子どもの支援を整理し、子どもを安心して任せられる居場所と認め、期待されていることを実感している。聖和小学校（区内南部）の小学校教頭がアジハラベイスの活動を認識し、期待を持って見ていると言われた時は驚いた。塾利用保護者からは、子どもが毎週行きたがっていると聞くことがあり、とてもやり甲斐を感じている。

・みまもりあいアプリ登録者数に元ヤングケアラーのインタビュー音声番組を紹介し、視聴者は290名に急増した。



『夢をあきらめない!』～ヤングケアラーと地域社会をつなぐ架け橋事業～

団体名：一般社団法人 こもれび

●主な事業実績（令和5年度）

①居場所(ぷーもあ・ぷあぷ)

対象者：小学生～高校生、延べ参加人数：290人、実施回数：97回

内容：学習支援やレクリエーション活動、企業訪問や社会見学など。

効果：自分だけの時間を"持つことにより、安心感を持って物事に取り組み、他者と関係を築けるようになった。

②体験学習(こもれびミュージッククラブ [KMC])

対象者：小学生～高校生、延べ参加人数：93人、実施回数：11回

内容：ギターをはじめ子どもが挑戦したい楽器で音楽を学ぶ教室を開催。

効果：バンド活動を通して、仲間と作りや自己表現力を培うことができた。

③音楽祭

対象者：KMCの子どもたち・地域住民・保護者、参加人数：120人
実施回数：1回

内容：地域住民や保護者などが参加できる活動発表会。

効果：自分自身が主役となり、達成感や仲間との連帯感が醸成された。

④専門研修

対象者：子どもに関わる専門職、延べ参加人数：198名、実施回数：12回

内容：SSW、教員、区役所職員などに対する応対技術の向上及び啓発活動。

効果：専門職にヤングケアラーに関する意識や応対力を高める効果があった。

⑤講演会

対象者：地域の子育て世代保護者など、参加人数：46人、実施回数：1回

内容：子どもの接し方において大切なことについて講演。

効果：さまざまな課題を抱える保護者に対して、子どもにとって良い接し方とは何かを気づいてもらう機会となった。

●工夫したこと・力を入れたこと

子どもをひとりぼっちにせず、安心感を持ってもらえるよう、ボランティアを活用し、大人の数を子どもの数と同等近く配置。居場所では大学生を活用し、子どもたちにとって近い立場で会話をおこない、学習・体験などをサポートした。社会福祉士・公認心理師などの有資格者が子どもに直接関わり、個別のケースとして学校やその他関係機関との連携を図った。

子どもたちが社会を知る場として、地域や企業がヤングケアラーの存在やその困り感を知るきっかけとして、外出企画や体験イベントを実施した。音楽祭など、子どもたちが支援をされる側でなく、子どもたち自身の本来の力を発揮し主役として活躍できる場を設けた。

専門研修においてはヤングケアラーを取り巻くさまざまな背景について研修を実施。毎回ワークを実施し、スキルの向上や専門家同士が横のつながりの強化を図った。

講演会では、子どもとの接し方について参加者に気づいてもらう機会を設け、子どもを取り巻く環境に変化を与えるきっかけづくりした。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

居場所への来所回数の増加、滞在時間の延長などの行動変化が見られた。自身のしんどさや家庭での出来事を話す機会も増え、関わる大人に対しての安心感を持てるようになってきている。体験イベントや音楽祭後には、次はもっとこんなことをしてみたい、との感想が出始めている。地域や企業、専門家らは、孤立した子どもを生まないための支援や社会との交流の場が必要であること、社会が関わることで子どもたちは飛躍的に成長することを知り、継続的な関わりの機会を設けてくれている。



① 居場所：ぷーもあ



② 体験学習：KMC



③ 音楽祭



④ 専門研修



⑤ 講演会

「ほっといたらあかん！子どもが子どもらしく生きる」を支える

団体名 NPO 法人やんちゃまファミリーwith

●事業実績（令和5年度）

対象者：本来大人が担うと想定されているような家事や家族の世話などを日常的に行っているヤングケアラー

参加（延べ）人数：747人（関わった参加者）

実施回数：相談支援窓口開設 63回、会議 28回、勉強会・研修会 10回、フォーラム 1回、養成講座 6回、小学校居場所 55回（市内 2校）

内容：①相談支援窓口 毎週金曜日②会議・定例会議・ヤングケアラー支援についてのワーキング会議③勉強会・研修会・フォーラムの開催④「matsuco 養成講座」の開催⑤小学校居場所の開催

効果：①相談支援窓口…行政に相談のあった当事者からの相談、又は地域のケアプランセンターからの相談により当事者とつながることができ、傾聴や訪問などをおこなった。行政を通じてヤングケアラー当事者からの相談も少しずつ件数が増加している。「ヤングケアラーに関する相談事」は、相談支援窓口があることで相談の場が浸透してきたと思われる。②③勉強会、研修会、フォーラムなど今年度も開催することで支援の輪が広がっていった。フォーラムには、教育委員会、子育て支援課、小・中学校教員、ちいきで活動されている民生・児童委員、主任児童委員など子どもに関わり取り巻く人たちが多く参加された。「ヤングケアラーという名称だけ知っていた。大変勉強になった。」という声もあり、これからも継続して啓発することの大切さを感じた。また、「教育と福祉をどのように つなげていくかが重要」という声もあり、それぞれがそれぞれの立場でできることを考えていくいい機会となった。④松原初の養成講座ということもあり参加者は熱心に受講され、受講後は同行支援や家事サポートなどのボランティアにつながった。⑤小学校 2校での居場所は、両校それぞれに、少しずつ、子どもへの関わり方や課題は違う中、全般的に子どもにとってホッとできる場となったことは間違いない。

●工夫したこと・力を入れたこと

・相談支援窓口に当事者が相談に来ることは少ないが、勉強会や研修会、フォーラムなどを継続的に行うことで、様々な人に「ヤングケアラーについて」理解と支援の輪が広がっている。気づける大人が増えていくことが大切。

・小学校の居場所は、毎月学校と打合せや振り返りを行い、どのように居場所づくりを展開し、子ども達の安心安全の場にしていくのかを意見交換している。

・松原初の養成講座は、「子どもを支えるヒト」を作りたい思いから始まった。子どもと向き合うことは、繊細で丁寧でなければいけない。その思いがしっかり伝わり講師陣も受講者も真剣に取り組み、11人のサポーターが誕生した。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

今年度から始まった 2校の小学校の居場所では、両校とも子ども達のホッとできる居場所となった。家のことや、自分のことを、話したいときに話せる場でもあり、居場所の日を楽しみにしてくれていた様子。一緒にゲームや折り紙をしながら家族のことや、自分の思いなどを話してくれる。無理に聞きこまずその子のペースに合わせ寄りそうことが大切で、学校からは「卒業するときは教室から卒業してほしい！」の思いが叶ったと大変評価を得ることができた。



ヤングケアラーの子どもたちが「自分」を優先し社会参加できるプロジェクト

団体名 特定非営利活動法人み・らいず2

●事業実績（令和5年度）

①自分時間プロジェクト

対象者：家族の世話や家事のため自分の時間がもてない小中高生

参加（延べ）人数：601名

実施回数：104回（うち、中学校内居場所は6回）

内容：居場所で自分の時間を持ち、やりたいことを仲間たちと協力して企画実践し振り返る機会を提供しました。

効果：自分で決める経験を繰り返すことで、選べる過ごし方が増えてきた。意欲が高まり、やりたいことが自発的に出てくるようになりました。90店近い子どもが利用定着し、地域のおまつり出店など居場所内活動だけでなく社会参加の機会も持つことができました。

②あきらめずにチャレンジしていいよプロジェクト

対象者：家庭を気にして将来の進路を意欲的に描けていない小中高生

参加（延べ）人数：44名

実施回数：11回

内容：様々な職業の人に仕事の内容について話を聞いて質問したり、実際に一部作業を体験しました

効果：今まで知らなかった職業を知ったり、実際の体験で理解が深まり興味の幅が広がりました。しごとへの意欲が高まり身近なアルバイトの話も聴きたいと希望がでてきました。

③啓発セミナー、地域連携

対象者：子どもに関わる支援者、教育関係者、ヤングケアラーに関心のある市民など

参加（延べ）人数：セミナー、勉強会 63名

実施回数：地域連携 48回

内容：子どもを取り巻く課題の共有、予防のために地域資源を活用することの重要性の理解、教育や福祉という分野を超えた取り組みの共有など

効果：子どもを取り巻く状況を、各専門分野の機関と共有検討することで多角的に捉えることができ、連携の必要性を再確認でき顔が見える関係を作ることができました。



●工夫したこと・力を入れたこと

①②さまざまな困難状況であろうとも子どもたちがあきらめずに自分のやりたいこと、こうなりたい将来を思い描く機会の提供

昨年度の実践で自分の時間を安定的に過ごすことはできたので、つぎのステップとしては仲間と共に過ごす、チャレンジしてみる経験の機会が必要だと考えました。特にやってみて振り返る経験は将来を自分で選ぶためには必須の体験だと考えています。そのためひとりひとりの意向、チャレンジしたいことと将来の目標などの発信をもとに企画を設定しました（お菓子作り、お店屋さん、ヨガなど）企画の中で、譲りすぎず、自分のやりたいことを話す、折り合いをつける経験を積み重ねられるように話し合い内容を工夫しています。他児との関りが少なかった子どもたちが、なかま意識を持つようになってきました。家庭ではできない体験や文化、行事など豊かな経験ができるように考えて提案しています（お祭りの屋台出店、菜園づくり、ボランティア体験など）

③ヤングケアラーの課題を理解する機会の提供

地域連携担当を配置して、行政、教育関係、福祉関係、地域など拠点地域の関係者とやりとりをする中で、専門分野以外の子どもをとりまく支援をお互い知らない、イメージできない現状が見えてきました。そのため、今年度は教育関係に造詣が深い講師をお招きし、それぞれの立場でできることや困っていることを共有する機会を作りました。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

①②定期的に来ることができ、顔なじみのスタッフたちと自分の好きなこと興味あることを話せる場所になりました。

「やりたい」ことを自分から発信できるようになり、実現したことを喜び「またしたい、もっとこれほしい」と新たな欲求を伝えられるようになりました。

イベントに参加しこれまで経験したことない人とのふれあいや大きな声を出してのマラソン応援などで仲間と過ごす時間を楽しめました。

③学校関係、福祉関係の接点を持つことで、顔の見える関係性ができ、連絡がしやすくなりました。専門分野としてできることや困りごとをお互いに知ること、お互いの現状を伝え前向きな協働を話すことができました。

ピアサポートの力を活かしたヤングケアラー支援モデル事業

団体名 特定非営利活動法人ふうせんの会

●事業実績（令和5年度）

対象者：府内を中心とする現・元ヤングケアラー・若者ケアラー

参加（延べ）人数：219名（「つどい」「ふうせんカフェ」）

実施回数：各6回（「つどい」「ふうせんカフェ」）

内容：

○つどい：年6回（奇数月）開催。現・元ヤングケアラー・若者ケアラーが集まる場。対面とオンラインを併用。

○ふうせんカフェ：年6回（偶数月）開催。テーマを設け、5名ほどの少人数で話をするオンラインサロン。

○ピアサポーター研修の実施：現・元ヤングケアラー・若者ケアラーの運営スタッフ対象

○啓発動画コンテンツ制作：ヤングケアラーをテーマとした多言語字幕付き動画を制作・配信（ほか）

効果：

「つどい」「ふうせんカフェ」を継続的に開催することで、何度も参加される方や、しばらくブランクをあけてから戻ってこられる方、新規参加の方など、ヤングケアラーとの繋がりや構築を感じています。さらに、参加者にとっての安心の場として、孤独孤立の解消にも寄与しています。

●工夫したこと・カを入れたこと

「つどい」では、参加者が安心して語ることができるよう、4つのルールを設けています。

①ここで聞いたことは外で話さない ②他の人の話を否定しない

③他の人の話をさえぎらない ④話したくないときは話さなくてよい

参加者を支える側にも元ヤングケアラーだったピアスタッフが活動しています。当事者だからこそ分かることやできる助言があります。ピアスタッフが自分の経験を活かし自信をもって活躍できるようピアサポーター研修を実施するなどしています。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

「つどい」参加者の声（事後アンケートより）

- ・たくさんの仲間がいることに安心感を感じた
- ・共感し合えることができ、心が少し楽になった
- ・会場全体が居心地がよかった
- ・秘密が守られているという安心感があり、話ができ助かった
- ・改めて自分の感情と向き合うことができた
- ・自分が感じていた色々なもやもやと向き合う上で貴重な経験ができた



ひとりじゃない！ヤングケアラーの居場所と相談をもっと身近に ～高等学校内に居場所と相談ブースを開設～

団体名 特定非営利活動法人 子ども・若もの支援ネットワークおおさか

●事業実績（令和5年度）

対象者：ヤングケアラー、ヤングケアラーとなる可能性のある子ども、元ヤングケアラー、ヤングケアラーに関わる関係者等
参加人数：延べ人数1422人（信太高等学校・Topic講演会の合計）
（信太高等学校での延べ人数カウント方法：昼休みと放課後來室の場合は「2」とカウント。同日、昼休みと放課後來室のAさん→2人、放課後來室のBさん→1人。）
実施回数：84回（信太高等学校45回・Topic38回・講演会1回）
内容：ヤングケアラーを広く知ってもらうための講演会を開催。当事者や元ヤングケアラーの生の声を届けることで、地域で子ども・若者をフォローしようという基盤を作る。
個別対応として、ヤングケアラーのニーズ把握に努め、面談、メール相談、SNS対応等南河内地区を拠点におこなう。
また、先駆的な取り組みとして大阪府立信太高等学校内での相談・居場所活動をおこなうことで、早期発見・早期対応を実現する。
効果：ヤングケアラー認知向上に繋がる講演会の開催。近隣市町村から市議会議員、福祉職員、興味関心のある地域住民が参加。またヤングケアラーの概要や支援を呼びかけるだけでなく、NPO法人ふうせんの会から元ヤングケアラーに登壇いただき、体験談を語ってもらうことで実体験を肌で感じることでできる実りある講演会の開催となった。
・ヤングケアラー当事者及び関係者に対する相談支援活動をおこなった。件数は少ないものの、SNSを使った相談活動は定期的におこなっており、利用者の心理的支えになっているところは大きい。
・大阪府立信太高等学校でのヤングケアラー当事者や関係者に対する居場所支援及び相談支援活動をおこなった。生徒数の13%以上が居場所を利用し、校内での認知度は向上している。居場所や相談窓口を継続して利用してくれる生徒が多く、子ども達のニーズにマッチした支援が展開できているといえる。
・Topic（富田林市きらめき創造館）を拠点とした、ヤングケアラーのための居場所支援及び相談支援活動をおこなった。中高生の出入りが多い施設のため、相談に来る生徒が増えている。家庭や進学のみだけでなく、サードプレイスとしての利用も見られる。また保護者や支援者の相談や見学もあり、認知してもらえ場所として機能している。

●工夫したこと・力を入れたこと

- ・ヤングケアラーを知ってもらうため、地域に向けた広報活動に力を入れた。まずはヤングケアラーの正しい概念の普及に努めた。
- ・実体験に基づくヤングケアラーの講演により、身近な課題であることを認識してもらうことに繋がったと思われる。
- ・高校内でのヤングケアラー支援をおこなうため、相談しやすい雰囲気づくりを考え、出入りしやすい環境を整えることにした。予約不要で途中入場及び途中退出可としていることから、自由度の高い居場所を実現。また、ケアについて焦点を当てるだけでなく、高校生活全般の課題解決に向けた広い受け入れ態勢を構築したことから、相談のハードルを下げることに成功している。
- ・Topic（富田林市きらめき創造館）を拠点とすることで、南河内地域で直接相談できる窓口を設置しているという認識につながり、当事者及びその家族の利用のしやすさへと変わっていった。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

- ・SNS等の相談は必要に応じておこなっており、一定数のリピーターが存在する。
- ・高校内での居場所及び相談活動が盛況で、実施日数を増やしてほしい、また開所時間の延長といった要望を生徒や教員等から受けている。必ず相談に来る子どもも多く、子どもの生活基盤の一部として機能している証拠だといえる。
- ・公共施設（Topic）での支援活動場所に、社会福祉協議会の職員やSSW等の視察があり、今後の連携に向けて様々な要望を受けている。
- ・地域住民の関心も高く、ヤングケアラーに関する事象や、それに類する相談も入るようになってきている。



ヤングケアラーの権利のための無料相談

団体名 社会福祉法人 大阪福祉会

●事業実績（令和5年度）

対象者：大阪府内のヤングケアラーとして負担を抱える、もしくは子どもの権利が侵害されている可能性がある子どもとその世帯の構成員。他、大阪府内のDV、虐待、養育不安等の課題を抱える要支援世帯。

- ・つどいの広場 実施回数：58回
- ・参加（延べ）人数：660人
- ・相談件数 58件 ・相談者数 20名

内容：

【相談窓口開設】ヤングケアラーやその家族からの相談を弁護士や社会福祉士へ繋げLINEやオンライン、来所での相談を受け付ける。

【集いの広場の開催】季節の行事（ハロウィンパーティーやクリスマス会等）や食育（バーベキューやバレンタインクッキング等）、学習支援を実施。

【セミナーの開催】地元の行政職員や団体、ヤングケアラーやその世帯の方々に受講していただく。

効果：

- ・初年度の取り組みを終え、継続的な関わりをすることで『ハピネス・パーク』という場所が、近隣のヤングケアラーや要支援世帯にとってフラッと立ち寄り、気軽に相談できる身近な存在になりつつある。

●工夫したこと・力を入れたこと

母子生活支援施設の知識やノウハウを生かした取り組みとして、ヤングケアラーを含めた、世帯の抱える問題に着目し、母子家庭の貧困やDV問題など各専門職と関係機関が協働し、根本的解決を目指した。特に、小中学校とカンファレンスや情報共有を行い、ヤングケアラーから世帯の状況を把握するだけでなく、弁護士相談へ繋げる等、ヤングケアラーを取り巻く負の環境を取り除くことを目指した。

また、ヤングケアラーの居場所として、施設を開放し「いつでも遊びに行ける」「頼れる大人のいる場所」となるよう保護者が参加に消極的な世帯へもアプローチをし続け、参加へのハードルを下げていき繋がりが継続して持てるよう工夫を行った。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

集いの広場の回を重ねるごとに、職員と顔馴染みになり会話をする機会が増えたことで、ヤングケアラーからイベントのない日にも「暇やから遊びにきた」「家にいたくなかった」等、気軽に遊びに来られる場所となっている。それにより関係性も深まり、デリケートな家庭の問題を打ち明けてくれたことで職員が一丸となり各専門分野からのアドバイスや行政とも連携し問題解決へと繋がった事案もあり、本事業に取り組みたことで救えた成功例として嬉しく思う。

